

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 夏目漱石『三四郎』

信州読書会では、二週に一度、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を800字で書いていただければ、放送中に紹介します。
(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(感想文は動画の下の説明欄にPDFへのリンクを張ってあります。)



東大構内の三四郎池



グルーズの絵 ヴォラプチュアス=肉感的
美禰子の目つきが、この絵を感じさせる
甘いものに耐え得る程度を超えて、烈しい刺激と変ずる訴え方 by 漱石

第23回のツイキャス読書会の課題図書は、夏目漱石の『三四郎』です。

[青空文庫版はこちら](#)

[朗読はこちら](#)

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

『三四郎』 夏目漱石 読書感想文

危ない。危ない。
人妻が誘ってくるので
名古屋の夜は危ない。

危ない。危ない。
毒入り水蜜桃は危ない。

危ない。危ない。
森の女に惚れるのは危ない。

危ない。危ない。
都会には乞食も轢死もあって危ない。

美しい第三の世界は
三四郎には手が届かない。

To be , or not to be : that is the question.

否定と疑問がぐるぐる巡る三四郎の脳内。
ああ
恋をしなければ
迷える羊にならなかったのに。

脳内近代化は
いつ起こったのか。
14歳から都会に住みはじめたわたしは
田舎も持たないし
郷愁もない。
三四郎のように
都会のあれこれに怖気づかないけれど
夢もない。

帰れる場所があれば
幼馴染の御光さんと結婚したかも。

美禰子の本心は
きっと安定の結婚生活。
美人だから選択肢はたくさん。
羨ましいけどそんなに打算的には生きられない。

冷めた青春
折り合いの生活。
とはいえ
広田先生や野々宮くんにもなれず。

批評家と三四郎。
科学と世俗。
その境界線は見えそうで見えない。

俺はどこへ向かえばいいんだ。
ストレイシープ。ストレイシープ。
矛盾をはらんで生きてく都会は
三四郎には少しハード過ぎただろうか。
わたしは矛盾と折り合って生きてゆく。
すでに帰れる場所もない。

(おわり)

『三四郎』感想文

田舎者の三四郎が、上京して行きの電車の中で、謎の女の誘惑があって、スパゲッティ作ってたら、謎の電話がかかってくるような開幕がとても良かったです。

新潮文庫の裏にも『あなたは余り程度胸のない方ですね』と赤字で書かれており、三四郎の性格をずばりと強調している気がしました。

三四郎＝度胸がない＝のび太で、三輪田のお光さんは、ドラえもんでいうところのジャイ子で、田舎にいたままなら三四郎はお光という名のジャイ子と結婚することになり、美禰子は憧れのしずかちゃんっぽい気がしました。

また美禰子は、グレート・ギャツビーのデイジーっぽい要素もあるような気がしました。

三四郎が優しいなと思ったのは、与次郎にお金を貸したり、名前を勝手に使われても結局は笑い飛ばしたり尊敬出来るほど仲がいいんだなというところです。

好きな場面は、美禰子と三四郎が、菊人形のあとに、小川の縁に座って話す場面です。

しかし、あの場面、空が濁り後から知らない男が憎悪の色で三四郎と美禰子を睨みつけているのが、やはり悪魔的な人物で、邪悪ななにかに追われてはぐれてしまったメタファーとして、後日、美禰子の絵手紙のセンスの良さを感じました。

やはり夏目漱石の作品は、初読では、なかなか理解しにくいので、読み方が浅くてすみません。

恥ずかしながら、夏目漱石の小説は、『こころ』しか読んだことが無かったのですが、軽いようで中身の濃い作品だと思いました。

読んでいる途中でも、頑張っているんだけど、なかなか進まず苦労しました。

僕の中では、夏目漱石というと、やはり偉大な文豪というイメージが強すぎるのかもしれないです。

しかし『三四郎』に続く、『それから』と『門』も積ん読状態なので読んでみたくなりました。

広田先生の見た夢の話が、村上春樹の話みたいでおもしろかったです。

(おわり)

イノマンさんのブログです。 『イノマンブログ』 <http://ameblo.jp/inoman-1984/>

『三四郎』 感想文

私も田舎から出てきました。今住んでいる所はそんなに都会ではありませんが、窓を開けると山が見えるというような事はありません。三四郎とは少し状況が違いますが少し共感を持ってました。

これから都会に向かう汽車の中で新しい生活に希望をもつ三四郎が、車内で女に会って今までの概念が覆るような体験をして、さらに女に何もなかったら「あなたは余り程度胸のない方ですね」なんて言われたら三四郎でなくても一生のトラウマになってしまうと思う。私も三四郎がそんな怪しい女に引っ掛からなくて良かったと思いました。

怪しい女はもしかしたら、時々そういう事をして宿代を払って貰ってるのかもしれないから。

田舎に居るときには分からなかった頭の中の世界や華やかな世界に少し疲れて母親に手紙を書く気持ちも分かる気がします。

田舎に居るときはとくに何もない地味な世界には魅力を感じなかったかもしれないけど田舎を離れると良さが分かってくるのだと思う。三四郎はどう思ったのかは読み取れなかったのですが…。

都会に出て少しは成長したと思うけど、純粋さは無くなっていない気がしました。無くして欲しくないなと思いましたし。

その純粋な三四郎に広田先生や美禰子も魅力を感じていたのだと思いました。

三四郎は美禰子への思いは叶わなくて、さらに与次郎にまで住む世界が違う釣り合わない指摘されほんとうに切ない気持ちだっただろうなって思いました。

でも、キレイな思いでのままだからこそ、ずっと胸の奥で忘れられずにいるかもしれない。

私の頭の中に、[村下孝蔵さんの『初恋』](#)が流れてきました。

(おわり)

「大人の迷子」 トリセツ

皆さん！テキストのP 115・9行目をご覧ください。

「七つばかりの女の子」が迷子になった様子が描かれています。

その迷子の近くにいる野々宮、広田先生、よし子、美禰子、三四郎はどうにかしてやりたいと思いつつ、みんな持論を展開して、静観します。結局、迷子は巡査の登場によって解決しますが、ここで大事なことを大人五人は気付いていません。自分たちの方が迷子になっていることに…。子供の迷子は、親が見つければ解決しますが、大人の迷子は自らが迷子をやめるまで解決しませんよ。

はい！復唱しましょう！

「大人はたいてい自らが迷子だと気付いていない。」

私は迷子じゃないって思っているそのあなた！いえいえ、人間の居場所なんて死なないと手に入らないって私は思っていますよ。なぜなら、居場所なんて空を流れる雲のようにつかみどころがないんです。美禰子も流れる雲を指して、「迷羊」と言ってます。三四郎のように家族と離れて上京したり、結婚しても離婚し、友人ができて絶交し、親しい人が亡くなり常と人間関係は動いています。感情は常に揺れていて、同じ状況は続かないからです。死んで墓の中に入れば、自らの意思や感情で動くこともありません。隣に家族が埋葬されているのか、無縁仏になって知らない人々と埋葬されているのか…そこが最終的な居場所のような気がします。恋愛なんて、迷子の典型的な症状ですね。そのところは、テキストの三四郎が体現しているので、もう一度復習してくださいね。でも、野々宮に粉をかけたり、三四郎を愚弄していた美禰子自身が大いに迷い込んでいました。結婚した夫君が最終地点なのかは…わかりません。美禰子もいまだ迷子のように見えますけどね。大人の迷子って厄介ですね。

でも、迷子で悩むことが生きている実感なのかもしれません。

さあ、復唱です！

「人間は迷子になるんじゃない。最初から迷子なのだ。」

え、私？

私は、広島の実家から未踏の地岡山に、受験の為に降り立った十七歳の冬から今まで、ずっと迷子ですよ。いまだに戻れていません(笑)

「迷羊…迷子…」結構素敵な生き方かも？！

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

『美禰子は教会で何を祈ったか』

私には、美禰子に信仰があることが意外だった。美貌も知性もお金も持ち合わせている美禰子に、どんな祈りが必要だったのだろうか。

菊人形を見に行った場面で、私は美禰子が野々宮に神を見ているのを実感した。けれどモーションをかけても手応えがかえってこない苛立ち。「責任を逃れたがる人だから、丁度好いでしょう」と野々宮を表現した美禰子の言葉が切なく響いた。

なぜ美禰子が野々宮に惹かれたのか。三四郎の「第一第二第三の世界」と広田先生の「偽善と露悪」という言葉を野々宮に当てはめてみると、ちょっと驚いてしまった。野々宮は穴蔵で、第二の世界で自分の研究を追求する。露悪の結晶であるその研究は徐々に発展を遂げ、ひいては世界レベルの科学の発展に寄与する。ここで野々宮個人の功績が、偽善に転化する。しかし加えて野々宮が油断できないのは、野々宮なりに第三の世界を持っている点だ。美禰子にリボンをプレゼントするなどアメを出しながらも普段は美禰子を特別待遇するわけでもなくクールだ。しかし美禰子の眼差しはしっかり察している。アドレナリンが沸き立つ運動会ではフロックコート姿で「おっ」と思わせる。手が混んでいてすごいワザだ。

このように、野々宮は第二第三の世界を駆使し、偽善と露悪の間のバランスを取ることが上手い。

美禰子は、その野々宮の絶妙なバランスに神を見たに違いない。さすが美禰子だ、審美眼に狂いはない。そう言う私も野々宮に神を見てしまった。

登場する男性たちには美禰子は露悪の塊のように映っているようだが、最後は結婚という制度に収まり、これからは夫や子どもに献身する道に進む。美禰子はその決意を神に祈ったのだろうと私は思う。美禰子なりに第三の世界を整理したのだ。人は、第三の世界と一つ一つ決別しながら神との距離を縮めていくのかも知れない。

美禰子は神を上手に使い分けている。信州読書会さんが紹介されていた「女性は男性を通じて神をみる」話で考えると、現実的な生活の芯を置くために男性に投影しているこの世の神と、一神教である神。うまく言えないが、この二つの神を持っている女性は日本には希少なのではないかと私は思う。そんな美禰子と野々宮が結婚したらどんな夫婦になるか知りたかったのだけど、残念だ。

(おわり)

belouga さんのブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。

『アラフォー-belouga のつれづれ』 <http://ameblo.jp/clearmandarin/>

『それ程浪漫的な人間じゃない。僕は君よりも散文的に出来ている。』

よし子は、兄である野々宮さんにわがままで困らせる。野々宮さんは、そんなよし子を愚物扱いしながらも、十分に、甘やかしている。彼がマッド・サイエンティストであれば、よし子のことなど一顧だにしないであろうが、そうではない。結局、兄は、妹を猫可愛がりして、妹は兄を、深く尊敬している。

そんな告白を、よし子から聴かされて、三四郎は、

(引用はじめ)

これしきの女の言う事を、明瞭に批評し得ないのは、男児として腑甲斐ない事だと、いたく赤面した。同時に、東京の女学生は決して馬鹿にできないものだと云う事を悟った。

(引用おわり)

のである。

美禰子は、野々宮さんと同級の兄、恭助と二人暮らしだ、広田先生と同級生だった兄、そして両親までも他界している。早くに悲しい別れを経験した気の毒な身の上である。三四郎と同一年だから 23 歳。美禰子は、唐突によし子の見合い相手と結婚してしまった。野々宮さんは、結婚する気がなかった。彼は、美禰子に、少なからず気があったのだろう。美禰子は、三四郎に耳打ちするふりをして、野々宮さんを試したこともあった。しかし、野々宮さんは、美禰子を選ばなかった。美禰子は、『責任を逃れたがる人だから』と野々宮さんを遠回しに非難した。野々宮さんはよし子が片付かなければ、結婚する気はなかったのだと思う。その意味で、よし子が縁談を断ったことは、美禰子と野々宮の関係に決定的な影響を与えた。よし子のお陰で、三四郎は、美禰子に弄ばれた。ダシに使われただけであるが、美禰子も、それは申し訳なく思っている。『われは我が咎を知る。我が罪は常に我が前にあり』 彼女が三四郎に思わせぶりを発揮したのは罪づくりだ。三四郎は美禰子に恋していたし、美禰子は野々宮さんに恋していた。ひょっとしたら、よし子は、三四郎が好きだったかもしれない。この三角関係にはズレがあった。この現象を明瞭に批評しえたら、三四郎は恋に落ちないだろう。広田先生は、明瞭に批評しうる。だから結婚しない。

(おわり)

『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

課題図書はこちらでお求めください <http://astore.amazon.co.jp/sphinx01-22>